

「旧約の信仰者たちの手本」士師たち ④ (11:32~34)

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、 サムソン、エフタ、
 また ダビデ、サムエル、 預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。

(ヘブル 11:32)

■士師記の時代 (Ariel's Bible Commentary "Judges & Ruth" と聖書辞典による、作成責任は清水)

*1	士師/リーダー	時期(紀元前)*4	年数	備考	救助者?
		(1447-1407)	40	出エジプトから荒野の旅	
		(1407-1400)	7	約束の地の征服 (ヨシュ 14:7~10)	
		(1400-1390) (1390)	10	分割からクシャン侵攻迄 ヨシュアの死 110歳	
		(1390-1382)	8	アラム・ナハラタイム (メソポタミア) の王クシャンによる支配	
1	オテニエル	(1382-1342)	40		○1
		(1342-1324)	18	モアブ人による支配	
2	エフデ	(1324-1244)	80		○2
3	シャムガル	エフデと同時期		ペリシテ人からの圧迫	○3
4	女預言者デボラ	(1244-1224)	20	カナン人の王ヤビンによる圧迫	
5	バラク	(1224-1184)	40		○4
		(1184-1177)	7	ミデヤン人による圧迫	
6	ギデオン	(1177-1137)	40		○5
	【アビメレク】	(1137-1134)	3	兄弟を殺し、私的支配	
7	トラ	(1134-1111)	23		×
8	ヤイル	(1111-1089)	22		×
		(1089-1071)	18	東側アモン人*2	
9	エフタ	(1071-1065)	6	西では契約の箱を奪われる	○6
10	イブツァン	(1065-1058)	7		×
11	エロン	(1058-1048)	10	西ではサムソンの死	×
13	アブドン	(1048-1040)	8		
12	サムソン	【1069-1049】		誕生は (1087) 頃*3	○7
	エリ	(1107-1067)		ペリシテ人に契約の箱を奪われて死す	
	サムエル (預言者としての活動は、1067以前から Iサム 3:20)	(1067-1020)	20	【年数 20 は、アブドン終了 1040 年から】	
		(1047) Iサム 7		エベン・エゼルの戦い	○
		(?)		サウルを王とする *5	
		(-1020)		ダビデに油注ぎ、死す・ダビデ 20歳逃亡中	
		(1020-1010)	10	サウル王の統治後期	
		(1010-1003)	7	ダビデ王 30歳ヘブロン	
		(1003-970)	33	ダビデ王エルサレム	○
		(970-967)	3	ソロモン王神殿着工まで	
	合計		480	I列 6:1	

前期

後期

- *1 士師記には、13人の士師が記録されている。祭司エリ（Iサム1:3、4:18）と預言者サムエル（Iサム3:20、7:15）は、士師記に記録ないが、士師である。
- *2 9番以降の士師は、活動の領域が、ヨルダン川の東と西に分かれる。東はアモン人、西はペリシテ人の攻撃を受けたため（士10:7~8）。東ではエフタ以下4名。西では、エリ、サムソン、サムエル。
- *3 士13:1のペリシテ人の支配40年間は、サムソンが誕生する頃からエベン・エゼルの戦い迄
- *4 時期は、出エジプトを（1447）と仮定し、「年数」を当てはめたもの。 おおよその推定年である。
- *5 サウルが王となった時期については、不明。
- Iサム13:1「サウルは30歳で王となり、12年間イスラエルの王であった」。原文では「サウルは〇歳で王となり、2年間イスラエル王であった」。欠けている年齢を「30」と推定し、2年間を十の位の単語が欠けていると推定して「12」年間と訳したものである。この訳では、サウルの死亡時の年齢が42歳となる。サウルが死んだときに息子のイシュ・ボシエテは40歳である（IIサム2:10） ことを見ると、この訳は誤りである。
- Iサム13:1の「2」年間を、「20」年間と推定する説や、サウルの王となった時期を、紀元前1043年頃と推定する説などがある。
- 使徒13:21では、サウロの在位期間を「40年間」としている。サウロ王が戦死した紀元前1010年から40年さかのぼると、紀元前1050年頃となる。この時期は、サムエルが士師として指導的立場にあったころである。サウルの登場は、エベン・エゼルの戦い（紀元前1047年頃）よりも後なので、サウルが王となった時期を紀元前1050年頃とするのは無理がある。「40年間」というのは、サムエルとサウルによる統治期間を通算して指していると考えられる。

■ 前回の内容 士師たち ③ サムソン から

1. サムソンは、倫理的にも霊的にも弱い人で、デリラの執拗な求めに負けてしまった。
 - (1) 体力的にも本来の自力は弱い（懲役では臼を引いた＝女性の仕事）。筋骨隆々の大男ではなく、その力がどこから来るのか不思議に思われたほど、見かけは普通の体格の男であったと推測される。
 - (2) 積極的に殺戮を好んだわけではない。襲われたり、裏切られたりして、その報復で戦う。その力の源は、主の霊にあった。
 - (3) この時期、イスラエル民族はペリシテ人の支配下で、それに抵抗するより、むしろ受容・同化していた。サムソンの戦いは、単独でのものであった。しかし、神はサムソンひとりに孤独な闘いをさせていたのではない。この同じ時期に、預言者サムエルを立て、イスラエル民族に語りかけておられた。
 - (4) サムソンは、倫理的に弱い。異民族の美しい女性に惹かれる傾向があった。その弱さを、神はサムソンが単独で戦うことになるように用いた。神は、人が弱く、欠点だらけであることを知っておられる。それでも用いてくださる。
 - (5) サムソンは、霊的に弱い。ぶどう畑を迂回した、これは注意深くナジル人の誓いを守ろうとしている。その他方で、汚れたもの、死体に触れてはならないという誓いの面では違反を重ねた。
 - ① ライオンの白骨の中に蜂が巣を作った。その蜂蜜を手にとってなめた。
 - ② ろばの生新しいあご骨を手にして、武器とした。
 - ③ まだ干されていない新しい腱（弓の弦にするための動物の腱）で自分の体を縛るようにさせた。
 サムソンはこのようにナジル人の誓いに何度も違反したが、神は忍耐してくださ

- った。
- (6) サムソンの弱さは、ついにデリラの執拗な求めに屈して、力の源を明かすに至った。越えてはならない一線をサムソンは越えた。そしてナジル人のしるしである彼の髪の毛は、デリラの膝まくらの上で、敵の手によって気づかないうちに剃られた。このとき、主の霊は彼から去った。
- (7) サムソンは、肉体的な裁き（両眼を失う）を受け、獄中につながれ、臼を引かされる。しかし、敵の手により剃られたとはいえ、「髪の毛を剃る」とは、それまでに受けた汚れから清められたことのしるしとなる。ナジル人として再出発できたサムソンは、獄中で主を呼び求めた。
- (8) サムソンは、ペリシテ人の領主たち 5 人全員が揃う祭りで見世物とされた（18 年前に神の箱を奪ったときの教訓は風化していたようである）。ここでサムソンは、最後の、そして最大の働きをした。巨大な石造の神殿、偶像ダゴンの宮がサムソンによって崩壊した。ペリシテ人は、一日にして 5 人の領主たち全員を含む数千人（屋上にいた者だけでも 3 千人）を失った。この出来事は、ペリシテ人たちにイスラエルの神に対する畏怖とサムソンに対する敬意を覚えさせるものであり、穏やかにサムソンの遺体をイスラエル側に引き渡した。サムソン、38 歳の死であった。
- (9) サムソンもまた、ヘブル 11:34 にあるように、「弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり」の人であった。

■ 本日の内容 士師たち ④ エフタ

1. イスラエル民族の罪（10:6）

- (1) カナン人たちの偶像の神々の中での主要なもの 2 つ
- ① バアル
 - ② アシュタロテ
- (2) その他の神々で近隣のカナン人たちが崇拝しているもの
- ① アラム・シリアの神々・・・ハダテ、バアル、アナテ
 - ② シドンの神々・・・前述に加えて、フェニキア人のアシュタロテ（I 列 11:5）
 - ③ モアブの神々・・・ケモシュ（I 列 11:33）
 - ④ アモン人の神々・・・モレク（I 列 11:7、33）
 - ⑤ ペリシテ人の神々・・・ダゴン（士師 16:23）、バアル

7 つ

2. ペリシテ人とアモン人からの圧迫（10:7~9）

- (1) 7 節 ペリシテ人の手とアモン人の手に・・・同じ時期に、二つの外敵
- ① ヨルダン川の西では、ペリシテ人。東では、アモン人。
 - ② 士師の活動が、ヨルダン川の西と東とでそれぞれ必要になる。
 - 西では祭司エリ、士師サムソン、預言者サムエル。ペリシテ人による支配は 40 年間続いた（士師 13:1）。
 - サムソンは「イスラエルをペリシテ人の手から救い始める」（士師 13:5）。
 - 40 年間の支配に終止符を打ったのはサムソンではなく、預言者サムエル（I サム 7:13）であった。サムソンはその 2 年ほど前に、ダゴンの宮を崩壊させて壮絶な死を遂げていた。
 - ③ 東では、エフタ、イブツァン、エロン、アブドン（士師 10:8~12 章）
- (2) 8 節 ここからエフタについての記述が始まる。8 節は総括。
- ① 「イスラエル人を打ち砕き、苦しめた」・・・ヘブル語の語順にそって直訳す

ると「閉じ込めた」、打ち砕いた」

- ② 「ヨルダン川の向こう側」・・・ヨルダン川の東側を指す
- ③ 「ギルアデ」・・・ガリラヤ湖から死海に流れるヨルダン川東側の地域一帯を指す地名。北部はマナセ半部族、中央部から南部はガド族の割り当て地。
- マナセ半部族の地域には、ラモテ・ギルアデという町があった。マナセ半部族の割り当て地は、ギルアデ地方の北側、バシャン地方まで含む。
 - ガド族の地域には、ヤベシュ・ギルアデ、ミツパ・ギルアデ、マハナئمなどの町があった。
 - ヤボク川が東からヨルダン川に流れ込む。
 - ヤボク川の流域の町は、ペヌエル、スコテ。
 - ヨルダン川に流れ込むところの町は、アダム（ヨシュア 3:16）。
 - ミツパという地名は、ヨルダン川の西側、ベニヤミン族の割り当て地にもある。これと区別するために、ミツパ・ギルアデ（「ギルアデ地方のミツパ」という意味）と呼んだ。
- ④ 「エモリ人の地」・・・この地域の先住民は、カナン人諸族のひとつ、エモリ人
- ⑤ 「アモン人」・・・ギルアデの東に位置する隣国。アモン人によるギルアデ支配は、18年間続いた。終止符を打ったのは、士師エフタ【彼は開くであろう】。

(3) 9節 アモン人がヨルダン川の東側にとどまらずに、川を渡り、ユダ族・ベニヤミン族・エフライム族の領域にまで攻め込んで来た。

3. イスラエルの叫びと神の応答、アモン人の軍事行動（10:10~17）

(1) 10節 イスラエルの叫び

(2) 11~12節 神は、これまでイスラエルを救ったときの外敵7つを思い起こさせる。

- ① エジプト人・・・出エジプト記
- ② エモリ人・・・民数記 21:3
- ③ アモン人・・・士師 3:12~14
- ④ ペリシテ人・・・士師 3:31
- ⑤ シドン人・・・士師 4章・5章、18:7~28
- ⑥ アマレク人・・・出 17:8~16、士師 3:13、6:3
- ⑦ マオン人・・・七十人訳聖書ではミデヤン人、士師 6:1~8:21

(3) 13~14節 「あなたがたが選んだ神々に叫べ」。真意は、悔い改めを求めている。

(4) 15~16節 イスラエルの悔い改め

(5) 17節 アモン人の反応

① アモン人は18年近く、ギルアデ地方のイスラエル人を圧迫してきたが、いよいよイスラエル人をギルアデ地方から追い出してそこを自国領土とするために、ギルアデ地方に軍を進めた。

② これに対して、イスラエル側も戦士を召集し、ミツパ・ギルアデに陣を敷いた。

4. イスラエル側では、誰が総指揮官になるのか（10:18~11:11）

(1) 18節 ギルアデ地方の民やその首長たちは、戦いのリーダーを誰にするか話し合った。

- ① イスラエル人には、各部族に首長たちや長老たちはいたが、召集された戦士たちを束ねる総指揮官のような立場の人は常設されていない。
- ② ミツパ・ギルアデに召集された民たち=戦士たちは、「ギルアデの民」とあるので、ギルアデ地方に住んでいたマナセ半部族とガド族。

- (2) 11章1~3節 ここで場面は変わって、エフタの生い立ちにさかのぼる。
- ① エフタは勇士であった。
 - 士師記で「勇士」と呼ばれるのは、ギデオンとエフタ。
 - ② エフタの父親の名はギルアデ。エフタの母親は、遊女であった。
 - ③ ギルアデには正妻がいて、息子たちもいた。彼らが成長したとき、エフタに財産分与を受けさせないように、彼らはエフタを家から追い出した。
 - 遊女の子には、もとより相続権はない。エフタの兄弟たちが、わざわざ相続させないようにしたということは、【父ギルアデがエフタを養子にして、正当な相続権を与えていた】ということが推測される。
 - 兄弟たちの行為は、父ギルアデの遺志に反することであり、違法である。ギルアデ地方の長老たちは本来エフタの権利を擁護すべき立場にあったが、それをしなかった、とも推測される。
 - ④ エフタは兄弟たちのところから逃げ、トブという地に住んだ。
 - トブは、「良い」という意味
 - ギルアデから北東に広がるシリヤ・アラムの肥沃な地方を指す地名
 - ⑤ エフタのもとには、ごろつきが集まって来て、彼といっしょに出歩いた。
 - 「集まって来た」・・・一度に多くの者が集まったのであればアサフ、しかしこの箇所は、ラカット「少しずつ収集する」の意味。エフタの間は、一人また一人と増えていったということ。
 - 「ごろつきたちが彼といっしょに出歩いた」・・・エフタが首領となって、隊商の警護をしたり、雇われ兵をしていた。これにより、軍事的経験を積んでいったと思われる。
- (3) 4~11節 エフタをリーダーとする
- ① 4~6節 場面はもどり、戦いのリーダーを誰にするかの話し合いは、エフタを招聘することとなり、ギルアデ地方の長老たちはトブまで出かけて、エフタと面会する。
 - ② 7節 長老たちの中には、エフタを追い出した兄弟たちもいたと推測される。また、エフタの兄弟たちではない長老たちについても、エフタの権利を擁護せず、兄弟たちの不法な仕打ちを黙認したという問題があった。
 - ③ 8~9節 長老たちは、エフタに「私たちギルアデの住民全体のかしらにする」と約束した。エフタは「主がアモン人たちを私に渡してくださったら（=戦いに勝利したら）、私はあなたがたのかしらになるのですか？」と尋ねる。これは、長老たちに対してエフタが、戦後も自分の立場を保証するのか、と確認している。
 - ④ 10節 長老たちは、(直訳すると)「主が私たちの前で聴いておられる」→ もし約束を守らないなら、神が私たちを罰する、と言ったうえで、改めて「私たちは必ずあなたの言うとおりにします」と答えた。
 - ⑤ 11節 次の3つのステップを経て、エフタがリーダーとなった。
 - エフタは長老たちといっしょに出かけた。
 - ギルアデの民は、エフタを自分たちのリーダーとした。
 - エフタは自分が言ったことを、ミツパで主の前に告げた。
 エフタと長老たちは、ミツパに終結していたイスラエルの戦士たち全員の前に立ち、戦士たち全員でエフタをリーダーとした。エフタは、主がアモン人を

自分の手に渡してくださり、戦いに勝利したら、自分をギルアデ地方のかしらとしてくださるよう、主に祈った。このエフタの祈りは、11:30~31の誓願へとつながる。

⑥ エフタの元々の家は、ミツパにあったようである (11:34)。

5. 12~28節 アモン人との交渉

(1) 12節 エフタの第一のメッセージ

(2) 13節 アモン人の応答「イスラエルは、私の国を取った。今、穏やかに返せ」

(3) 14~27節 エフタの第二のメッセージ「この地は、アモン人の領土ではなく、エモリ人の領土だった。そのときのエモリ人の王シホンは、エジプトを出て目的地に向かっていただけのイスラエルに攻めかかって、滅んだ。以来、この地には300年間、イスラエル人が住んできた。我々はあなた（アモン人の王）に何の罪も犯していないのに、あなたは戦いをいどんで我々に危害を加えようとしている」

(4) 28節 アモン人の拒絶

6. 29~33節 アモン人との戦い

(1) 29節 主の霊がエフタの上にくだる

(2) 29節 エフタの戦法は、おそらくアモン人の王が思い描いていたものとは違った。

① アモン人の王が率いる軍は、ギルアデ地方に侵入して陣を敷いていた。防衛する側のイスラエル軍は、ミツパに終結している。その戦力がどれくらいか、見定めてから総攻撃をかけようと、アモン人の王は時期をはかっていた。

② ここで、エフタが率いるイスラエル軍は、ミツパを要塞化して立てこもるのではなく、ミツパを出て、ギルアデ地方を北上した。アモン軍の陣営から離れていったのである。

③ イスラエル軍は、さらに北上を続け、ギルアデ地方を通り抜けて、「マナセ」、すなわちバシャン地方のマナセの割り当て地にまで入った。

④ アモン人の王から見れば、イスラエル軍はギルアデ地方を放棄して逃げたように見えた。おそらく、ここでアモン軍の陣営は、臨戦態勢を解いたと思われる。王とその親衛隊は本国に帰ったであろう。

⑤ このとき、イスラエル軍は、反転して一気に南下し、ミツパも通り越し、アモン人の領土に侵入した。戦闘は、ギルアデ地方ではなく、アモン人の領域内で展開された。29節「アモン人のところへ進んで行った」とは、その意味。

(3) 30~31節 エフタの誓願

① 日本語訳聖書は、「私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を」と、いかにも人を想定しているように訳しているが、それは誤りである。

② 「何であれ、私の家の戸（複数）から出てきて最初に私に会うものを（男性代名詞）」→ 雄の動物を想定している

③ 当時のイスラエル人の家には、複数の戸口があった。家の一番手前のスペースは家畜の居場所であった。

(4) 32~33節

① 「アモン人のところに進んで行き」=アモン人の領土内に入って戦った。

② 「主は彼らをエフタの手に渡された」=おそらく、王の親衛隊、軍の中核となる部隊を撃破したものと想像される。

③ 「二十の町を激しく打った」=アモン人の町々を攻撃し、20の城塞都市を破壊した。

- ④ 「こうして、アモン人はイスラエル人に屈服した」(33節)
7. エフタは誓願のとおり実行する(11:34~40)
- (1) 35節 「もう取り消すことはできない」
- ① 人身犠牲はモーセの律法で禁止されている(レビ18:21、20:2~5、申12:31、18:10)。そのような違法な誓いであれば、取り消さなければならない。そして、取り消すのであれば、祭司に人身評価をしてもらい、銀30シケルまたは10シケルをささげる(レビ27:4~5)
- ② しかし、ここでは、エフタは「取り消すことはできない」と言っているので、エフタが違法な人身犠牲を想定したわけではない。
- ③ 「全焼のいけにえ^へオラー」とは、「完全に神にささげられたもの」を意味する。動物であれば祭壇の上ですべてを焼き尽くす犠牲である。エフタは、誓願をしたときには、動物の犠牲を想定していたが、それが「わが娘」にあたったとわかったとたん、彼女が「完全に神にささげられたもの」となること、すなわち、彼女が主の幕屋で奉仕者としてその一生を献身して過ごすことになる、と理解した。この場合、娘は生涯結婚せず、子どもを持つことがなくなる。
- ④ 幕屋での献身者の例(出38:8、Iサム2:22)
- (2) 39節 父は誓った誓願のとおり彼女におこなった。その結果は、「彼女はついに男を知らなかった」。彼女を殺したとか、犠牲にささげた、ではない。
8. エフライム族からの攻撃を迎え撃つ(12:1~6)
- (1) 1~4節 エフライム族からの攻撃
- ① エフライム族の戦士がヨルダン川を渡って東側に来る。ツァフォン(スコテの北側)に陣を敷いて、ミツパにいるエフタを殺そうとした。その理由は、ギルアデ人のエフタを、イスラエルのリーダーとしては認めたくなかったから。
- ② このとき、エフライム族は、ギルアデ人を「エフライム族とマナセ族の割り当て地の中にいる、落ちこぼれ(逃亡者)」だと侮辱した(12:4)
- (2) 4~6節 エフタとギルアデ人は、エフライム族と戦って勝つ。ヨルダン川の渡し場も攻め取って、「エフライムの逃亡者」=敗走して逃げ帰ろうとしていたエフライムの兵士を捕らえ、「自分はエフライム人ではない」と偽った者を処刑した。
- (3) 6節 この戦いで倒れたエフライム族は、全部で4万2千人であった。
- (4) エフライム族の不満の罪は、今回3回目(ヨシュア記17:14~16、士師8:1~3)
9. エフタの士師職(12:7)

エフタの信仰について、どのような手本が見られるのでしょうか

1. 「遊女の子」、「ごろつきが集まって来て、彼といっしょに出歩いた(強盗をした)」という箇所だけで、エフタの人物像を判断することはできない。
- (1) エフタは、「勇士」と記された。士師記ではギデオンとエフタだけである。
- (2) エフタは、預言者サムエルが挙げる代表的な士師4人のひとりである(Iサム12:11)→新約聖書ヘブル11:32も、同じ4人を挙げる。
- (3) エフタは、ただ戦うのではなく、事前に戦争を回避するための外交交渉をした。
- (4) エフタは、正確な歴史的 understandingのもとに、アモン人の王に彼の誤りを正すメッセージを送った。
- (5) エフタの戦い方は・・・
- ① 合理的。準備万端で戦意十分の相手をおかし、態勢がゆるんだところを突いて、

一気に攻撃する。終始戦いの主導権を握って、自分が思い描いたとおりに戦う。

② 戦略的。敵の本国に打撃を与え、再び戦争を仕掛けてこないようにする。

③ 彼自身の証言 (12:2~3)

- イスラエルの主要部族であるエフライム族にも参戦を要請した。これはおそらく、アモン人の王との交渉をしている間である。戦争回避の交渉をするともに、戦争となったときの準備を平行して進めていた。
- エフライム族は助けてくれないことがわかった。少ない兵力でどのように戦うか、エフタが考え抜いた作戦が①と②であった。彼はこの作戦に「自分のいのちをかけた」。
- 「そのとき、主は彼らを私の手に渡された」。自分の手柄を誇るのではなく、勝利は神が与えてくださったものであると証言した。

(6) エフタには未婚のひとり娘がいた。妻は登場しないので、妻は早くに亡くなっていたと思われる。再婚もせず、女性関係の記事もない (サムソンとは対照的)。

2. エフタの生涯をまとめると、次のようである。

- (1) 遊女の子として生まれるという不遇な生い立ちにもかかわらず、よく学び、モーセ五書とヨシュア記を深く理解していた。これが、のちにアモン人の王へのメッセージにつながる。
- (2) 父ギルアデの養子になった。エフタが父から信頼と愛情を受けていたことがわかる。
- (3) 異母兄弟たちはエフタに財産の一部が分与されるのを惜しみ、彼を家から追い出した。命の危険を感じたエフタは、遠くシリア・アラムの地、トブまで逃げた。ギデオンのそばめの子だったアビメレクが、異母兄弟たちを殺したのとは対照的である。
- (4) 彼のもとには、ごろつきたちがひとりまた一人と集まり、警護や傭兵をして生活を立てるようになった。アビメレクが「ごろつきの、ずうずうしい者たち」を金銭で雇ったのとは違い、エフタの場合は人が寄ってきた。この点は、エフタはダビデに似ている (Iサム 22:1~2, Iサム 25:16)。
- (5) エフタは、政治的外交的手腕と戦略的軍事指揮能力を兼ね備えた人物である。士師の中では、最も「士師」にふさわしい資質を持っていたと言える。そのまま行けば、イスラエルの王に最も近い人物であったかもしれない。しかし、彼はユダ族ではない。主は、彼に6年間だけの士師職の期間を与え、かつ、彼の跡を継ぐような男子を、子にせよ孫にせよ、残させなかった。
- (6) 彼のひとり子の娘は、独身のまま、その生涯を主の幕屋で仕えることになった。その時期は、少年サムエル、後の預言者サムエルがシロの幕屋で成長する時期と重なる。シロの幕屋での信仰的な環境は決して良いものではなかった。エフタの娘の存在は、少年サムエルの成長にとって有益であったと想像される。
- (7) エフタは、アモン人との戦いからわずか6年で、地上の生涯を終えた。娘の年代から想像すると、エフタは若くして死んだと思われる。彼は「ギルアデの町々 (複数形) (12:7) に葬られたとあるので、墓は複数設置されたことになる。彼の遺骨が分骨されたのはなぜか? 子がなく死んだ彼のために、彼と行動を共にした「ごろつきたち」か、エフタの士師としての働きを高く評価したギルアデの人々が、自分たちの町に墓を設けたのであろう。短い士師職であったが、エフタは代表的な士師のひとりとして、聖書に名をとどめることになった。

士師エフタとその娘

エフタは主に誓願を立てて言った。「もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものとしませう。私はその者を全焼のいけにえとしてささげます。」(士師記 11 : 31)

■はじめに

これは、士師エフタがアモン人との戦いの前に主に誓願を立てたという記事です。その内容は、新改訳聖書では、戦いに勝って無事に家に帰ることができたら、最初に家から出てきてエフタを迎えた人を全焼のいけにえとしてささげると、なっています。

そして、士師記の記事は、この誓願の結果、エフタは自分の娘について「誓願どおりに彼女に行った(おこなった)」(士師記 11 : 39) と続きます。

では、エフタは自分の娘を殺し、その血を祭壇のまわりに注ぎ、遺体を祭壇の上で焼いたのでしょうか。

モーセの律法において、神は人をいけにえにすることを厳しく禁止しました(申命記 18 : 9~10)。そして士師は、別名「さばきつかさ」、すなわちモーセの律法に基づいてイスラエルの人々を裁く司法長官であり、戦いになれば、先頭に立って戦う指揮官でもある立場です。

その士師であるエフタが、このような誓願を立て、思いもかけなかったとはいえ、自分の娘がそれに当たるはめになって、神に誓った手前、仕方なくそれを実行した、というのでしょうか。

結論は、そうではありません。この学びは、フルクテンバウム博士の聖書解説書「士師記・ルツ記」に基づきます。

1. エフタの誓願(士師記 11 : 31)

- (1) ヘブル語聖書を語順もそのまま直訳すると、次のようになる。

このようになるであろう、

外に出て来るものは・それは何でも(アシエル)・外に出て来る・戸口【複数形】から・私の家の・私に会う、
私が帰るとき・無事に・子たちから・アモン人の、
属するであろう・ヤハウエに、
そして私はそれをささげるであろう・オラーを

- (2) キーワードは、2つ。「アシエル」と「オラー」である。まず、アシエルについて。

- ① アシエルは、関係代名詞。物体、動物、また人についても用いる。
- ② 新改訳聖書が「者」と訳しているのは、後の記事でエフタの娘が主のものとした結果を見ての訳である。
- ③ アシエルが物を指しているのか、人を指しているのかは、文脈でわかる。民数記 5 : 10 では「物」と訳されている。モーセの律法で、聖なるささげ物となるのは、家畜の中からは牛・羊・やぎ、鳥であれば山鳩か家鳩、穀物であれば小麦粉、と決まっていて、人はあり得ないから(レビ 1 : 2、10、14、2 : 1)。

- ④ エフタの時代、イスラエル人の家は、通常、1階は4つの部屋に区切られ、外との出入口に近い所は、家畜部屋であった。エフタがこの誓願をしたときに、想定していたのは、自分が家に帰ると、まずどれかの家畜に出会う、その最初の1頭をオラーとして捧げるということである。
- ⑤ もしエフタが家族のだれかを人身犠牲とすることを想定していたら、エフタには一人娘しかいない。妻はこのとき存命であったかは聖書に記録がないのでわからないが、存命だったとしても、家族は妻と娘だけ。この場合、誓願中の「外に出て来る」「私に会う」という主体は女性になり、誓願のことは、文法上は女性形が用いられるはずである。しかし、原文では男性形が使われており、エフタが家畜の雄を想定していたものと思われる。
- (3) 二つのキーワードは「オラー」
- ① 「全焼のいけにえ」と訳されているが、オラーの本来の意味は、「完全に神にささげられたもの」である。他の捧げ物の場合は、捧げる人はその一部を祭司から返してもらって、食べることができた。オラーでは、それが許されず、すべてが祭壇の上で焼き尽くされた。
- ② エフタがアモン人の戦いから無事帰還して家に帰ったら、最初に家の戸口から出てきてエフタに会ったのは、家畜ではなく、自分のひとり娘であった。これを見たときに、とっさにエフタが思い当たったのは、娘を主のものとしてささげる、すなわち、彼女は霊的なオラーとして、その生涯を処女のまま純潔を保って主の幕屋で仕える女性となる、ということであった。
2. 幕屋において働く女性たち
- (1) 出 38 : 8
- (2) Iサム 2 : 22
3. エフタの嘆きと娘の悲しみ (士師記 11 : 35~38)
- (1) 「ああ、娘よ。あなたはほんとうに、私を苦しめる者となった。私は主に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ」・・・エフタがこのように嘆いた理由は、ひとり娘を生涯独身とさせるということは、自分の血筋がこれで絶えることになるため。
- (2) エフタの娘も、「私が処女であることを私の友だちと泣き悲しみたいのです」と言って、2か月間、山々の上で自分の処女であることを泣き悲しんだ。
4. 結果 (士師記 11 : 39)
- (1) エフタは、「誓った誓願どおりに彼女におこなった」。
- (2) その結果、「彼女はついに男を知らなかった」。彼女は生涯、純潔を守り通したと言う記事である。Iサム 2 : 22 に記されたような非行に走った女たちの中には彼女はいなかったという神の確認である。
- (3) 時期的には、エフタの娘がシロにあった幕屋において仕えた時期は、最後の士師であり預言者であったサムエルが幕屋の中で成長していた時期と重なる。神の計画において、エフタの娘が、サムエルが育つ環境のために有益な信仰者として、幕屋で働いていた可能性がある。